

第28話：海流見下ろしオリオンとの対話

龍のユニはタロたちを背に乗せ上空に昇って行きます。風除けのオリオンを先頭に、ディオ、タロ、カワセミと続きます。上空に昇りきると、安定した飛行となります。緩やかな揺れに、タロは居眠りを始めました。

ディオは勇気を出して、前のオリオンに話し掛けます。

「オリオンさん、あなたには、反抗期がありましたか？」

オリオンは、背中越しに答えました。ディオを包み込むような笑顔が、たくましい背中から感じられました。

「オリオンさんはないね。オリオンで良いよ。

そうね、反抗期、あってね。親爺は神で、母は人。私は半神。親爺が何を思っているか、半信半疑だった。親爺も私と同じことを思っていたと思うよ。

でもね、大人に近づくにつれ、色々とわかってくることが多くなる。そう、時だね。時が解決する問題も多いね。時は忘れさせてもくれ、癒しにもなる。辛い時は特に。」

ディオは、ディケの話を思い出しながら、オリオンが言うからにはほんとうか、とも感じました。

そして、またオリオンに聞いてみました。

「オリオン、名前のことなんだけどね。ディケは、自分の姉妹のエウノミア、エイレネも、一つの『時』の名前と言っていたけど、名前ってなんだろうね？

僕たち、以前にインディオの少年に会ったとき、彼が一時世話になったトテム族の掟を教えてくれた。その掟とは、『飼っている家畜に名前をつけてはならぬ。』というものだったんだ。名前を付けることで家畜と気持ちが繋がり、愛情が湧き、殺して食べるなんて到底出来る訳はないからあとと思う。生きるための知恵なんだろうね。でも、ディケが言う名前は、少し違う気がするんだ。

『名前』って何だろうね？」

オリオンは、嚙んで含めるように話し始めました。

「トテム族の名前について、別の話もあるね。酋長には各々の名前、つまり本名がある。でも人は彼を『鷹』とか『鷲』とか言う名で呼ぶ。本名で呼ぶのはごく親しい親族だけだ。親族しか本名を知らないからね。なぜか？他人に本名を知られると、呪いを掛けられることがあるからさ。だから本名って大切なのさ。

でも、本名を知らないことで困ることもあるよ。異なる世界に旅立った人を呼ぶときは、本名を知らないと声を掛けることさえ出来ないんだ。本名で声を掛けられないと、自分が呼ばれていることもわからないんだ。」

ディオは、インディオ少年を思い出しながら頷きました。

オリオンは続けます。

「『名前』って『言葉』だね。でも、本当に美しい景色を見たとき、『言葉にならないほどの美しさだ！』とか、『絵にも描けない美しさ』という気がする。『言葉』は、確かに、人に物事を知らせる有用な道具だが、それでは伝わらないものもある。『言葉』には力の限界があるよ。例えば神秘的な、霊的な体験をしたとき、『神』という言葉を使うことがある。人は、あるものや事柄に名前をつけないと不安であり、また名前をつけると安心するね。でも安心し、そのことに真剣に向かい合えなくなるのさ。わかったつもりになって安心する。これは大変怖いことなんだ。『頭でわかるのではなく、心で感じる！』この言葉も、君のどこまで伝わるか、わからないけどね。」

だから空想でも良い。『感じる旅』が大切なのだ。」

オリオンとディオの話が続くうちに、夕暮れが迫ってきました。北の空に北極星が、その周りにイリスの居城の龍座が見えます。そして龍のユニの上から下を眺めると、龍座と同じ黒い大陸が見えます。先程、虹から飛び立った地、中つ国の形です。左向きの龍の顔は、精悍なユニの顔と同じです。

そして、また新しい旅が始まります。

「葦が芽を吹き始める」穀雨の始まりです。

それからどうなったでしょう？お話し、続きはまた明日！